

ペルー史から消えたヒターノ：“negro”・“mulato”等の観念をめぐって

大平秀一（東海大学）

キーワード： アンデス先住民、ロマ人、「ジプシー」（カレ、カロ）、16世紀、民族音楽

Gitanos desaparecidos en la historia del Perú: problemas de palabras de “negro” y “mulato”

SHUICHI ODAIRA (Tokai University)

Keywords: *Nativos Andinos, Romani, “Gypsy” (Calé, Caló), Siglo XVI, Música folklórica*

「発見」・「征服」の時代以後に新世界に渡ったロマ人・ヒターノ（「ジプシー」）に関しては、これまでほとんど着目されてこなかった。15～16世紀のスペイン社会の状況、新世界発見のプロセス、そして歴史文書等の考察を進めると、アンデス地域にも相当数が渡ったことは疑問の余地がない。民族誌に目を向けると、先住民社会への影響も少なくないように思われるものの、ヒターノという名称を伴う文書の記述は、極めて少ない。本報告では、アンデス先住民社会で継承されてきた歌に着目し、両者の接触・共存の可能性の一端を示した。その上で、ヒターノがペルー史から消されてしまう要因の一部を指摘した。

ヒターノは、遅くとも1425年にはイベリア半島に姿を現している。彼らは、ローマ教皇から改悛を命じられた書状なるものを携え、それにより国王や貴族・領主の通行許可証を得て自由に移動していた。しかしながら、1499年の勅令（*Pragmática*）により追放が命じられた後、彼らは一貫して排除され、アルマデン鉱山での労働やガレー船奴隷として酷使されている。彼らを規制する法令の発行は、スペイン全体で250以上にも及ぶと考えられている。

こうした状況下で、大西洋に隔てられ、人目の及びにくい土地に満ちた新世界は、身を隠す格好の場となり得る。遅くともコロンの第3回航海（1498）により、少なくとも4名のヒターノが新世界に渡っている。

一方で、1503年にはインディアス通商院（*Casa de Contratación de Indias*）が設立され、宗教改革の激化する1517年以後は、厳しい渡航規制が敷かれるようになる。ただし1511-1517年は、誰もが渡航できる状態にあったし、それ以後も法が

必ずしも厳格に機能しておらず、すり抜ける多様な方法があった [Friede 1952]。

新世界の文書では「漂泊者」（*vagabundos*）に言及したものが少なくないものの、ヒターノという固有名詞を伴っているわけではない。しかしながら、その「漂泊者」の中に彼らが含まれていたことは、法令を通して確認できる。新世界では、『法令集』（*Cedularios*, 1596）、『インディアスの諸王国法令集』（*Recopilación de Leyes de los Reynos de las Indias*, 1680）が編纂されている。後者の第2巻、第7編、第4章には、「漂泊者とヒターノについて」と題され、1555～1668の間に制定・再確認される第1～5条の法令が示されている。第5条には、「ヒターノとその妻、子供、使用人をインディアスから追放すること」（フェリペ2世、1581年2月11日、エルバス）と、直接的にその名が冠せられている。

フェリペ2世の治世下で編纂された前者の『法令集』には、「陛下の許可なくインディアスに入り込んだすべてのポルトガル人をペルーから追い出し、この王国（スペイン）に送るよう命じる法」（1568年7月15日、フェリペ2世、マドリー）が所収されており、「ペルー地方の *Ciudad de los Reyes*（リマ市）に座すアウディエンシアの王、長官、聴訴官は、その地方に、我らそしてポルトガル王国その他の地域の許可なく入り込んだ極めて多く（*mucha cantidad*）のポルトガル人およびヒターノがいる」と、アンデス地域・ペルーにおける相当数のヒターノの存在が明記されている。年代より、王室への報告は、第5代副王トレド就任直前の副王空位時代以前になされたと判断される。

さらに同『法令集』には、上述した『インディ

アス法令集』第5条が、異なる文言を伴って示されており、「副王により、ペルー地方の総督・提督そして Ciudad de los Reyes (リマ市) に座す我らのアウディエンシアの長官を任じられた Don Martin Enriquez 閣下より、我らのインディアスのいくつかの場所に、彼らの様式で用いる衣装と言葉そして乱れた住まいで、インディオたちの間を歩き回るヒターノが密かに入り込んでいると報告されている。無垢なるインディオを容易に騙し、この王国の損害の原因と捉えられているからである... (後略)」と、ペルー・アンデスの先住民とヒターノの接触・共存が問題視されている。

しかしながら、ヒターノという固有名詞を伴うその他の文書は今のところ確認できない。よって、先住民の語りや歌に目を向けてみると、極めて示唆的な歌詞が確認された。

ペルー中央高地の伝統的な祭祀 (チョンギナダ) では、次のような歌詞を含む歌が女性によって歌われている。“Escúchame momento falla morí yo (ちょっと異変を聞いて、私、死んじゃったの)、Quisiera contarte lo que me pasa a mí (私に起こったことを伝えたいの)、Entre lágrimas en los ojos te diré (目に涙を溜めて、お話ししましょう)、Me enamoré de un Hindú, Chongino (インド人・「チョンギノ」を好きになったの) / Me enamoré (un) Hindito, Chonginito (インド人・「チョンギニト」を好きになったの)”。

この歌詞の中で、チョンギノあるいはスペイン語の縮小辞が付されたチョンギニトは、「インド人」とも呼ばれている。先住民言語やスペイン語では意味不明とされるこの「チョンギナダ/チョンギノ、チョンギニト」という音をスペインやポルトガルのロマ人・ヒターノの言語 Calo 語に探ると、Chomidiñi (Bofetada: 平手打ち、打撃)、Chomidiño (Bofetón: 強烈な平手打ち、打撃) という単語を拾うことができる。これをスペイン語化 (ar 動詞化・過去分詞・縮小辞、16世紀以前 n と ñ の差異は曖昧) すると、Chomnidinada、Chomidino、Chomidinito と捉えることが可能で、上述した意味不明の語とほぼ同質的な音となる。よって歌詞の中の「インド人」は、パンジャブに

出自をもつヒターノと捉えることが可能となる。

かつてアンデスでは、山の神々に若年者を捧げる慣習があった。考古学的資料によれば、基本的には男女一対となり、2つの墓坑に男女が各々入り、そこで頭部を殴打されている。上記のようにスペイン語化されたロマニ語チョンギナダ・チョンギノ・チョンギニトは、「一撃を加えられた者」という意味となる。ケチュア語で同質的な意味をもつ山の名称は、少なくない [大平2019]。よって上述した歌は、死者・山の神々の世界に向かった男女の記憶が歌われており、一方 (男性) はヒターノだった可能性が示唆される。

先住民社会と密接に関係していたにもかかわらず、ヒターノはペルー史から消失している。その理由は、下層社会への無関心、それが故の記述の欠如、追われる身であったが故に彼ら自身が出自の隠蔽を謀っていたこと、そして近現代の学校教育の影響下にある我々研究者が、negro、mulato、zambo、zambaigo といった人種のカテゴリーを、さほどの疑念ももたずに「アフリカの黒人奴隷」と結び付けて捉えてきたこと等に求められよう。15~16世紀のスペイン・ヨーロッパでは、ヒターノの肌の色の黒さが強調され、社会集団・言語名である Calo は、スペイン語で negro を意味する場合もある。インカの征服者の中にも、negro という愛称をもつ者がおり、そのみから「アフリカの黒人奴隷」との関連で理解・注目されてきた。しかしその一人 Extremadura 北西部出身の Juan García は、ヒターノと深く関わる大道芸的要素も伴う pregonero (お告げを広める者) であり、征服後のクスコでもその仕事に携わっている。今後、さらに検証を加える必要がある。

【主要参照文献】

Friede, Juan, 1952, Algunas observaciones sobre la realidad de la emigración española a América en la primera mitad del siglo XVI. *Revista de Indias*, No.49, pp.467-496.

大平秀一、2019、「ペルー・『ワロチリ文書』にみられる山の神々：色彩と明暗をめぐる感性・イメージ」、『アンデス・アマゾン研究』、3号、pp.1-56、DOI: https://doi.org/10.50952/janams.3.0_1。